

第1回 小中一貫教育懇話会

- 1 開催日時 平成 25 年 2 月 14 日 19:00～21:15
- 2 開催場所 生駒北小学校多目的室
- 3 出席者 小柳和喜雄（奈良教育大学教授）、中谷辰幸（生駒北小学校育友会副会長）、影林保志（生駒北中学校育友会会長）、森田由紀（打田・高船保護者代表）、藤堂宏子（ひかりが丘自治会会長）、窪田博明（久保自治会会長）、十文字良明（生駒北小学校長）、安達光男（生駒北中学校長）、井上重樹（生駒市校園長会会長）、富山二郎（生駒北小学校教諭）、政岡俊伸（生駒北中学校教諭）

（事務局）早川教育長、峯島教育総務部長、真銅教育総務課長、伊東教育指導課長、吉村教育指導課課長補佐、前田教育指導課指導主事

4 開会あいさつ（早川教育長）

この懇話会は生駒北小学校と生駒北中学校の一体型小中一貫校についてご意見をいただくもの。児童生徒の減少が続くこの校区において、教育環境の整備や教育条件の充実を図ることが、子どもたちの学力保障につながると確信してこの構想を提案した。しかしながら、タウンミーティングや地元説明会などの場で、本提案を支持する意見もある一方、否定的な意見も聞いている。

この問題は保護者や地域、現場の教職員にとっても重要であることから、保護者や地域の皆様の意見を十分尊重していく所存であり、市の考えを押しつけるものではない。小中一貫校に関しては、懇話会運営に係る費用を除き、一切 25 年度当初予算案に計上しない。ただし、この結果に関わらず、高山幼稚園の方は耐震診断の結果、建て替えが必要と診断されているので、遅くとも 26 年度当初予算に関連予算を計上する必要がある。そのため、小中一貫校に関する議論は 10 月末までには終えていただきたい。

どうか、高山地区の教育向上のために、参加者の皆様は、各所属団体の意見等を集約し、結論を導いていただきたい。

5 小中一貫教育懇話会について

- ・参加者紹介（事務局）
- ・懇話会の趣旨等についての説明（事務局）
- ・座長選出（奈良教育大学 小柳和喜雄氏）

6 全国の小中一貫教育の現状及び成果と課題について（小柳教授）

7 生駒市施設一体型小中一貫校 概要説明（事務局）

8 意見交流

参加者：小柳先生の説明で、取組のメリットはデメリットにもなり、逆にデメリットはメリットにもなることがよくわかった。北小・北中で小中一貫校を実施しないことになっても、この取組は生駒市全体で実施していただきたい。

参加者：学校は地域が支えてきた。学校教育全体は停滞している。そのためには地域が一緒になってやっていかなければならない。コミュニティ・スクールが昨今取り上げられているのは、学校だけで教育活動を行うのが困難だから。教育を地域がどれくらい支えられるかが問われている。

座長：一体型の小中一貫校になったらどうパワーアップするのか、その様子を実際に見ることや聞くことが大事。市としてはこれから視察などを行うことにもなると思う。コミュニティ・スクールと小中一貫は寄り添ってきている。コミュニティ・スクールから小中一貫に入るところがあったり、その逆のところもある。コミュニティの考え方は国が進めているものである。

参加者：小中一貫校はチャンスだと思った。ピンチがあるからチャンスがある。デメリットがあるからメリットがある。本校で児童数が減り、そのために教員数が少なくなり、先生方がしんどい思いをしているのがピンチ。しかし、この取組で、奈良県初の新しい校舎になり、教職員の数や負担が減ることは、非常にプラス。ピンチはチャンス。

参加者：一小一中ではなく、京田辺市の普賢寺小学校の子どもが県をまたいで北中に通っている。小中一貫校になると、高山地区では普賢寺小学校の子どもと北小学校の子どもにずれが生じる。私は次の3つのことでこの構想に違和感を感じている。ひとつは小中一貫の構想のスタートが、「子どもの実態から課題が見つかった」ということではないこと、そして、小中一貫と給食センターの移転と高山こども園の3つがセットになっていること、それに小中一貫が全国的に教育行政のコストダウンがきっかけだということ。つまり、子どもの実態や地域の思いからスタートしていないことである。

座長：スタートが教育の論理でなく経済の論理であることに違和感があるという意見や、ピンチをチャンスに変えるのも大事という意見が出た。子どもたちに大きな課題はないがもっと伸びる可能性があるなら、小中一貫に取り組む値打ちがある。

参加者：動機はコストダウンだが、それをチャンスに変えるのが大事。教育課題がないから小中一貫をしないというのは、少し違うと思う。

参加者：学校の先生は子どもたちにある教育課題をオープンにしない傾向がある。今の北小や北中に問題がないなんてあり得ない。もっとよくなるのであればやるべき。

参加者：小柳先生の客観的データはとても大切。小柳先生には保護者にも話をしていただきたい。子どもを9年間見つめる指導というのは新しい取組。私はやっていきたい。先生方が勉強すればその指導法は獲得できる。

座長：過渡期は先生方が大変だろうと思う。地域と家庭と学校で信頼と納得がないとやっていけない。お互いが尊重し合って上手くやっていき、それが自分に返ってくると値打ちがある。家庭や地域は先生方を応援していかないとうまくいかないだろう。

参加者：これを実現するには4つの壁があると考え。ひとつは、中1ギャップや小1プロブレムが小中一貫により解消されるということ。これは子どもが本来乗り越えていかなければならない壁であるはず。もうひとつは固定化された人間関係の解消と言われるが、それは9年間でなかなか解消されないのではないかということ。3つ目は教師の疲弊。知り合いの富雄第三小中学校の教師は、夕方二歳の子どもを迎えに行き、風呂に入れてから学校に戻り、夜11時まで学校にいるようである。そして会議の回数が増えること。教師ががんばればいい、ではない。小中の連携は分かるが、それと小中一貫とは

同一視できない。

座長：ギャップをなくすのではなく、ジャンプできる段差を残してギャップを緩やかにする方向に今は進んでいる。それを教育的段差や意図的段差という。会議が多くなるのは過渡期の問題か本質的問題かを見極める必要がある。学校としての財産ができてくると会議の数も減る。

参加者：北中学校には課題はたくさんある。全ての教科において専門的知識や技術を持った者が担当しているわけではない。一貫校にかけられるお金があるなら先生を増やすことに費やしてほしい。子どもの人数が少なく、部活動などに支障がある。子どもの数を増やすために一貫校にすることが有効な手立てであるなら私は大賛成。だが懸念もある。今の北小に校舎を建てるとなると敷地はとても狭い。細長い校地で野球部が活動できるような運動場は確保できるのか？設計の具体案が欲しい。

座長：小学校と中学校の両方の免許を持つ教員が集まることにより、教師がパワーアップしていると福井や長野で報告されている。また、コミュニティ内で部活動等を見てくれる人が増えるということもある。

参加者：一貫校になろうがなるまいが小学校と中学校が交流することは賛成だ。一貫校になって転入してくる子があるのは分かったが、いやになって出ていく子はいないのか。子どもが増えないなら何もならない。

座長：校舎が変わって人数が増えた学校もある、ということ。大事なものは人。不満や不安が大きくなると子どもは学校に通いたがらず、他校に児童生徒が流れる。

参加者：きれいでいい施設を整えてくれるのはありがたい。その一方で教える先生方が一番大事。やる気のある先生が来てもらえるなら話を進めていただいてもいいが、そうでないと入れ物を作っただけになる。事務局に質問があるのだが、いつぐらいに結論を出すのか。育友会の代表として意見をまとめないといけない。また、これは子どもが減るという前提での話であるので、高山をどう活性化するのか、高山の人口をどう増やしていくのかを行政が横断的に考えてほしい。

事務局：先程もお話したように、みなさんの意見を最優先したい。10月末までにある程度の結論を出していただきたい。地域や保護者、先生方の意見を尊重していく。この懇話会の内容はホームページに掲載していく予定である。この懇話会の雰囲気や話し合いの内容を伝えていただき、みなさんが所属する団体の意見を集約してもらいたい。結論がまとまらない場合、高山幼稚園については建て替えをしなければならないので、幼稚園用地を新たに探す必要がある。

参加者：過渡期はコーディネータ役が必要。小中が連携する取り組みを生駒市全体で、そして、市の主導で行ってもらいたい。

参加者：今まで通り通わせていただけたらと思っていたが、将来を考えると少し不安になった。

参加者：10年前の北中は1学年50人ぐらいで2学級だったが、現在は23名と聞き、かなり少なくなっていると感じた。今後、子どもの数はどう推移していくのか。子どもが増える可能性があるのか調べないと、生徒数の変動に施設が対応できない。

座長：中長期的な展望が大事だということ。今日の意見をまとめたうえで次回の課題としたい。

9 事務連絡（事務局）

10 閉会あいさつ（事務局）